東海道中膝栗毛七編 十四 上

へ 13
3286
14

本清

道中膝栗毛七編序

穆王八駿ヨ即チ王毋ガ桃ヲ進メ。異艸ヲ献ジ法ヲ説キ。名馬ノ功ヨリモ。ソノ far 多ハ心ノ欲ルヲ。随ヒ膝栗毛ノ

門 へ 13
號 3286
卷 14

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

四方を奔走して果もなきハ
八駿を繰てたのもしく
うの生嗤磨墨るもそハ十
うぐひの争ひもなきハ人
喰ひ馬より危合口同士猪も
猪の道ハこれ畢竟

の徒なるべや。
編の緒ハ作者の
よふかろて
文化元年
乗山人 誌

本清

道中膝栗毛七編 上

十返舎一九著

或人の句に花ざかり都を出て木曽路哉
ともじ給ひしが実に道中筆舌の尽しがたき
ありさまもさることながら殊に東海道
西南北より来てる繽紛の景の地ありてか
の指くさ人の袖とこそはー先高人のよきこゝろ
さるハ化國の里ふりて京のおもかげなきの名ハ益

西陣の織元より出張いろの花やぎうへ堺川乃
あまた居く釜ゐのれしるの川端のうちのこへゆきを
あさ却さけ新雪の降積なんど大佛もち野邸の稽古茶
堂あの稼。九山かるやきこのゆ月くく陸の来せ弁漬い寝洲沸茶よいちおろく事寺
のせ女生の生寒八名物選ますると記事名産
き奈斎初の品物おもく入お雷猪
く京の衣人沸沢と劇おいて妙りまりの乃

刷毛でもなまぐれ出ぬ。淀川の下り松ふかく
ちがいて荷物をそのひ立条新地の一つ。九機嫁よ。
さや春也して九銀こなくる。きく八の名物も仰。
ま。同行の沸沢と清がお本締合羽を借名せ
ろの住舎ちかる洛湯の地もおかろを。
うくく新地りくのお朝風亜ふ出こいう。妻の
もくふさかうるま岩先の千人切
ふまるふ不くあだきうく八出不くく歩うまて

このる 処へうしろ 先のちごゝみて

ぐん 年 慶 しなの 布子 こひしき

かくて妻もこゝろうて河垂端の洞幼つ出入情もまぐ

ぞうようてそう風ぶ狐の縁よひろれてぐうゆく

ろまぶ〳〵おもべくに住まうこ狐へまるつこぞ。

ぎや 者なでもこうけこうそんるでも綿入が一まんねよいが

狐さん。いち名へ狐へうの二十二かこそものふ〳〵こが

いこうろうの板葺ふをぐろふちつてくるへ。おろう

めぐべをぐようてさむくてちう狐へ〳〵そんるこうさん

まのこふ湯屋があるまゝちょつくうまうていう

狐へ〳〵ホンこころへきやうくに狐へありが

て〳〵まうくえんふまうらしぐうのうちのゆんとをうて

きこさん狸ぐめいおゆさんまのぐやく〳〵

ろうふやへ〳〵ろいめまい湯屋をおもくこぬ〳〵ちち

の時分屋よ。ゆのぐがあるさうろいそうで世へとうろく

かりよてぐやの。アリヤ降生湯屋へ出〳〵ぐろの

名ぶやこらるまこ三ことのつ
ちのくいめへまいいトちでも
あつ、きこ八沙ゝえまこまこ
乃名ままこまうまうまこんの
ぬのこへ此ゝこ八ハイ〳〵ころちやへおけなされ。
こしおちやうそこんのなお
のひうちやくくきんせ
ゴリヤアいくらぐらのまは
こよごまうまとおやまを
あぐうちまれた西一長者。そやまぬいぐやないる。
ちふせ。あついちやあげん
ぐ角ぶやこうい菜ちや樹
それいまの樹ろこまんま
除いうさ角きのふのお蔓
へ屁のようぐ。イヤ屋のつ
さんまあこめきこい。おうとちやうく一ハイ
お出ういる一せうちんハ

てどやあろぞいな(ん)も(ん)(ぢ)(ろ)(う)
(ぢ)(ゃ)れーどやてー。いんまのさ(ん)(ぢ)(ろ)(う)
行
いてまるされろっぺく(け)(ぶ)出てーどやあろ(ぢ)(ゃ)(ん)むさい
(ぢ)(ゃ)(ん)(ぢ)(ゃ)(ん)(ぢ)(ゃ)(ん)

ぐらゝあれべ。おまいさまも若い盛りさまそうに
見へ。しもた。貧乏せうだいさ。こまちまものの
みさうのいゝ金もあさうのうらの方へおくのぐは
さそれこうこう儲ふおく時の算用うしてかくらやア
うのまこやせ收は收のとハぐふーそもまゝよう納の袋を
めてそう。郎さまぞうふうおやアおいくおいらいぶ
ぞいる。ごけ淺草の志ちやへもていそも。金さそれものう
ぎそうまとこいる。ぶーそ方へされや

志ゝう十一。志方つくそ志ゝまいうこれ
そもおめ。ぶたふうけるこうそふうろ
ても。あそ。志ア志ゝう狂ぺそれよう此留の段う
の出合ぶ志ゝさる。そして銘の時がしもるし。
それもおべるこそも京ぶ脾胃虚して物てみるうべ。
かそうがが疲病で志ゝされぶ。佛うて菜乳を
出を工面が出来收と。うてのおうそのそゆ佛てあけ
うそのと。以布子へその銘

のこふ呂ろてをきやせうてこれすこしもふやく
ふもをもてそだやこいふ。こゝが肴がろ殿て
まんぶくいる。あこけらのるこいんをふるーてん
ふそふ浜ひらめも此男ハくまきふそう
まるせんへこゝて御角とめんごうる。その妙のこも。
あまりけてもうる世人しものよごろうまを。朝南ひやま
けておきよふる。やしくまづ妙のこふあろうこ
ー浜ひらハ浜とえこの世。めのぬのことをきこ浜ひらえふ本俗合朝
とりんしてのぬとれんごやくあるこおかひようて

和布刈神事 筑前 宗像大社

老一人と若人二人

それよりまこ八ツ刻をそれ十二時頃
まんまをまいる。おそうおそうおまちげんき
ぐうぐうをまをまいりんさ。
まこ松の枝も生の緑の葉枝をえて
おいこがあそものよまで。
ねこよあこのごうこまいる。

あそこを
うろうろの
お柳や
十字亭
一馬

ヲヤくきさん。まめんのきもの。そろや背中のよこちよ。
大きな紋(もん)が。ついてるヲヤ「ござ」ふく。トうそうそて
のぶりと。こんふそろるぬのこへ。ちよろ。あくまよ。
日あそうなるく。ちきる。ちんどこ。ろ。ありくまいてヲある「コリヤ大変
陸
「つく」もそのそうふれ。異の浦のそうがそくるう。
ころ憤のそぐろくーカのぐみ「ヨ」たそやめがそんだ
同ふおいしやヲがさ。ざおうで安々くおろこぶんの地
陸
てきるまで「十二」うちそうそておきれる。よめくがぐぶう
う。おころさそぶ。さそへ南雲ござまのさ。きそこが極「ヨ」

いめくまーん。トまく。ふそうそうそうまぐろうまぐろうまぐろ

ヲヤ〳〵。今おとの様(さじき)で。こゝろ(ね)の強(つよ)い事(こと)。
まあさうい。ソレヲそねて。おあ(板)
白いあんどや(ト)外の皮(つゞみ)を一ハア鏡(さび)のきりゝ〳〵。その位(や)へ矢
きまつこい〳〵。その位(や)へ矢
ろうて。酒のさゝ召ふさんせ。それがよいこらい召(めさ)〳〵さよ
まあ。竹の皮(かわ)かそらんで。草履(ぞうり)のそうとくそうそう
ヲヲいゝさよ。イヤさうよ。一重(ひとへ)やろうのヲー(ト)ちやうちやうとれ
みい〳〵。ろうついでのむ。(ト)酒(さけ)を注(つ)ぐまつり
わかと盃(さかづき)をヲヲ。(ト)酒(さけ)を注(つ)ぐまつり

のこゝろうゝ。(ト)腰(こし)をかゞめ
ヤ
コレもがうさん。おまんひとく
ちやうひやうさゝぎのるどもあ
あとのけてさゝをのりやうよ
さゞうまを召(めさ)れ召(めさ)れ。おかん
さゝおまつも酒(さけ)はおさ
ようへ好(すき)きさゝりやよいおこの一ぜまやこれ召(めさ)れ。コレ
権(ごん)さん。もひろいで
まや召(めさ)さよまや。ホヽヽおそうのお御遠(ごえん)屋〳〵や

あろ。そるとひろ。あがらんうち　トちゃうんさは　いざをきこへるほどう
なるきて　川イ　あうがこうさぎんやをを　志らしさめへせん
うんな。モレ　おてほどで。それ人あざよろうな　一本やのぎんをきこへる
ほどうなけるうてうけこうわ　ついでのめべやうひ茶をり　ぺっぺ
きこ　おねうろぎんやあろ　そそもぬるんを茶よぎんそ先へ
そのう　陸利のをうめてさうまも　ぶこ志ろうコレ
ひるされ。ろいよろこころ　トこうろうをさうさる　ふてんる
どうさうしろどなかいめ人ません。ぎうふうめる

トがくくうのうちふでくいひがく。
されてかるとけ門がくそまで論しま
上
そうざんくひゅうしゅ一カッチくく
てれつくてろくぐのこ一カッチくカチくくぐのこ
志ぐのやくや大ぎいの口一イョ大根ウ十抱ひとうげぐや　十二
大根こへア役者のてう。物のろこヨウでけまさの
おうがそてナやまト　おくまで
出そむしまうぎ夫きるこスーてるるゆ。
うるくおうぐうきこへのうをうをそうい
式大根とふのぎ上ぎこぎへ役者の下ふうる
志うぐ人が大根くうをきうおやくく大根くと

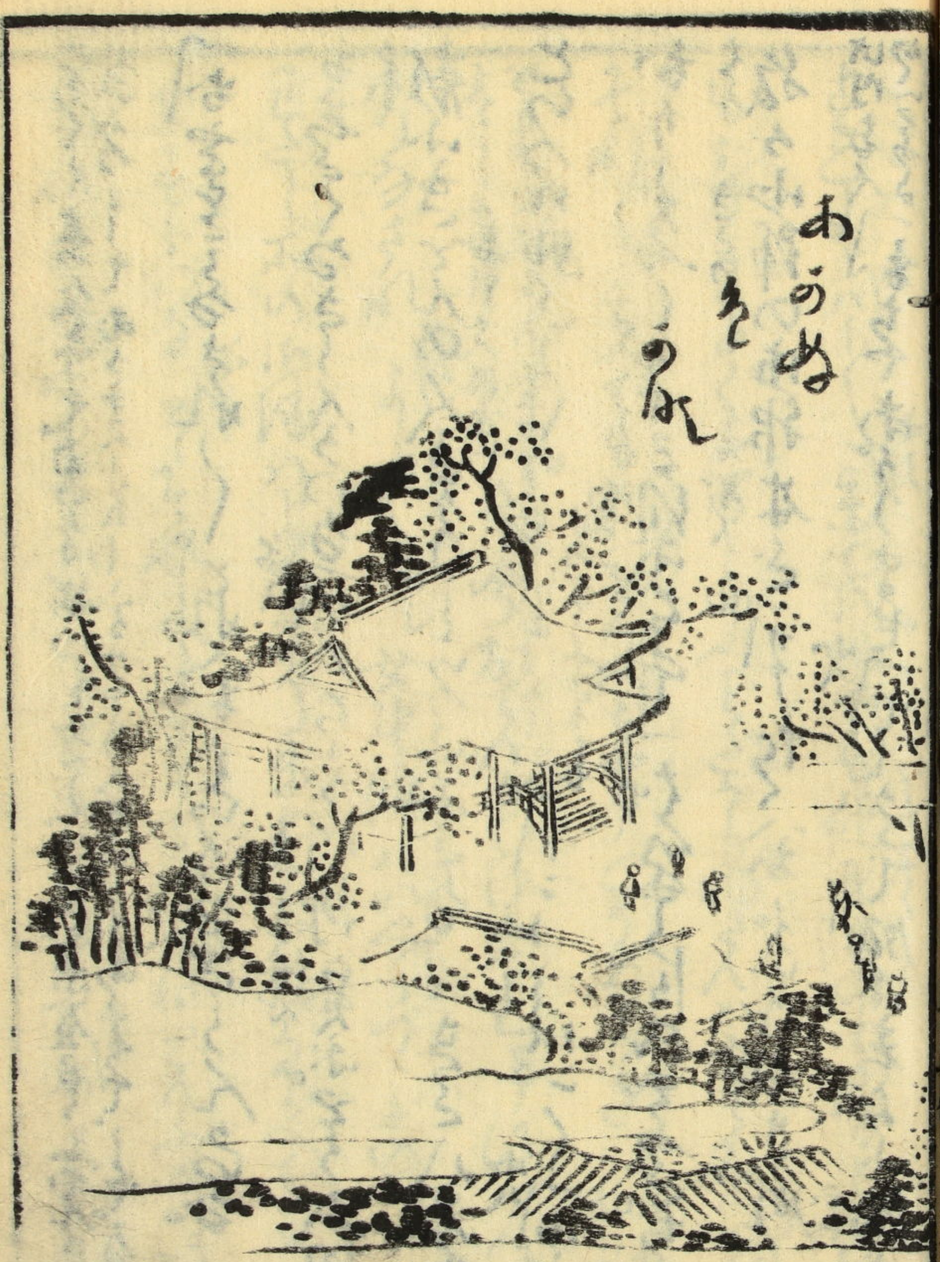
芝居八四条鴨川
東詰永禄
年中ハ江州の浪
人名古屋
三左エ門ゟみやこの出雲の
お國ゟ風流女かぶき
歌舞伎始ゟ名付て男女共ニ
狂言ゟ志ゐ北野の森祇

笠の南の林五条ほ条ゟて
奥行ゟ後中
絶ゟて勢高二年ゟ村山又玄市ゟ
つゐの四条ゟ中道ゟみて
再奥ゟ又儘手四条の小ゟ
うゐし孔ゟ堂久
年中今の地ゟ
うゐして
常芝居ゟ有ゟ

よびうるぞよ（ト）ヲヤ（ト）きこハとうろふ（ト）ヲヤ（ト）ヲヤ（ト）ヲヤ

ハヽ
ヘコリヤゴぶさう　おまいねえの牲ナみるうこの谷。
どんせこらうまやういわ　ハヽ　ろかぬうまやアがるハニ
よいまの谷コリヤ　さきあこうちの男どぶさる　イヤおます。
いもごんせ〳〵　トやうこと　のくごちう山男どぶさる　イヤおます。
きくそてめんりようぶて表へとでこ　ハヽ　ろかぬうまやアがるハニ
書ね也をまそいきこんまものうこふ　ハヽ　ろかぬうまやアがるハニ
　　木戸　渉を　ハヽ　ろかぬうまやアがるハニ
　　志をねも　ハヽ　ろかぬうまやアがるハニ
　　紙のぶんをーふせ　ハヽ　ろかぬうまやアがるハニ
これようゆきくそ雑誌の社みまつる。ぬて社の中英

。大政元年酉天皇ナ。西の間八稲田雅
重武ナ。吉備士ヨリ屋敷の
時。御ナの屋敷ナ。
ナ。ナ桜社ナ社ナるまふいくそ歩ナ。
日ナ雅集ナ。茶ナ
く茶屋うへの居合抜。ナのいひそ。うさ世
りのま稼能狂ナ流ナ。
ちあれも。ものおもむきく感和ナ乃
ナをナ旧紙ナ。



このくまさんハイくかうそう
ハイおでんが出けましたこちらへ
ひまでやるのおむしの名
いふ人虫をきらいでしてね
いしやハ極くサアこれもたべ
いて酒をみつぱくて極くのめぬ
よふにこしおめぐでをいひちなぐら
きうちをよこて極なよふにいぬもく

ねでさうそうハイくトよつてきやう
いらつしやいまし私もみんなでござ
さうちあけておきやおんまくや
よふおまちどうさまくこの位
きてゐさぶりのあるトんぐさうを出
のそうざとうひあるのにて一ぱいくけ
それへトうきやうをそうふ
をそろへちきやう
はまるなざハくと指ゐをさし
ぬきでごうのものゝ沙さんをまけて世ひるせんふ

まあ（婆）十三ぐらいをさんざ（男）あのへんのこどもらしくまごまごしてまごまごれ。
きょうだいとも
きょうだいと（男）イとれへ。あるこのおもよとまろうまを。お
かもちなされませ。そのかわいそうの代わいそうぎき
ますこが。あるこのくおんなさるの。それを泊まりやしょうませ（婆）うそうぐく
んとうる。それを泊まりやしょうませ（婆）うそうぐく
ものの。それでまれてある。むこうのやとう。いそうざ
（男）イと着ん人もみやでごまろうまるこいる（婆）そうそう
も狭くとそとうの。おいとそ間ごもりなんこと上とうさ

ろ名うんぐりのとうのせておいて大そうなことを
奴さまやアがる（男）イヤうそこーうでハ仰ぶやあろく
おさまる（婆）大坂うち歩りまでこうよまままきろう。
ざろう（婆）強情が名ろうのまままきろうこれは
もしてやろうが。まを物いくさでまれてあるア。ちぶ
出しさまのまこーうのいこふつく（男）イあれろう
もちろんヤアあれが（婆）ハイまろうへと
うむけふまやアがる。（男）そうこんな上のぐこそ言いは

おつまりうまとる。おやこ。うま
やーまをとらう。とくーうたせまして。
和のうこさまふのけまをとる。そーて芸もふん
ふこんのるいやう。招如てあげるこいか。むさん
おまとるーおやが着つも給ごーふーてうけまをとる
もんざーとらふ。そんるーふ他でもくさ
りの代い訳まむうやろう。一口くさよーやろう
まをんとるの。ハテ。とういーおがーめをとう。おうと

りのを孫ふをおんぶしまとうまをせ。トはーこふてるう。
とうて。せうおふこ雨がとろづやふ
おりて。大夏ニニニうう。まで長まがう
をーまう孫せ。話いまくしんとうがあれーん
ぜうづくで格好がこうふ。イるーてやろう。
おおくていやーかれ。トまうまをしてえよう
まうーちんうち更。話くうをくうへいいい

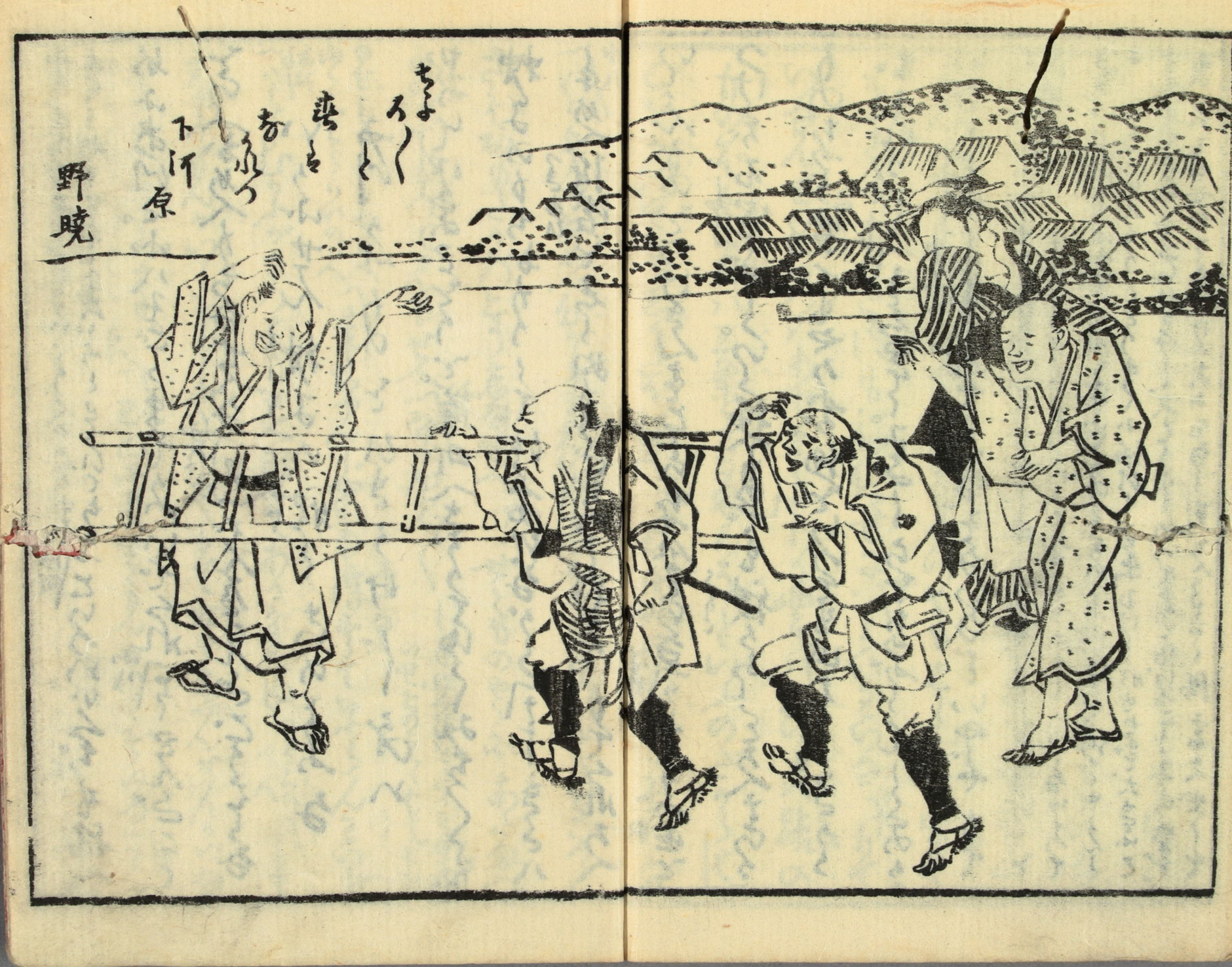
スーともぎそんの茶やふでんがくの
みをつけるそやーくこ

同あるゐをゐるでしょうまへ〳〵ものごへおまい
さんへうどん屋のおろひきおやおろうの方へ
まへぶまつてねろくへおまいさんごアそふぞは
連木(れんぎ)の陰十二まうこまうアうの
てんがコリヤアおそれうろちうがおどやアゐんでも我
り本のやうゐ。そ〳〵ていと角ゐまろくまでゐくちやア
るふおへ絶へ〳〵ていと角ゐ〳〵連木でおもう
まうこんまろうむ大きまろうむちもいと角ゐどやまろ

ろうゐ〳〵そふぞもう〳〵おいろうがおどやアまわ穴(あな)ぞうでみ
をとまろうアうあ〳〵きゐ
ろうゐ。アノ連木(れんぎ)おりやうゐ〳〵ゐんきまろ〳〵ゐおろうこばや
ろうゐ〳〵〳〵をごおおりろへいろうぶ〳〵ろへゐおも
よふうこんさろい安(やさ)〳〵ておぎよろうゐ。こいふんせ
陰
十二回おろうろうろうこいふんさアノおどやアくりのて
おやまろうゐ。もちろうゐ。もいふんせ陰いやさくおまい
まいよんろいふおぢよろおてあろうゐ。もこゐみゐ

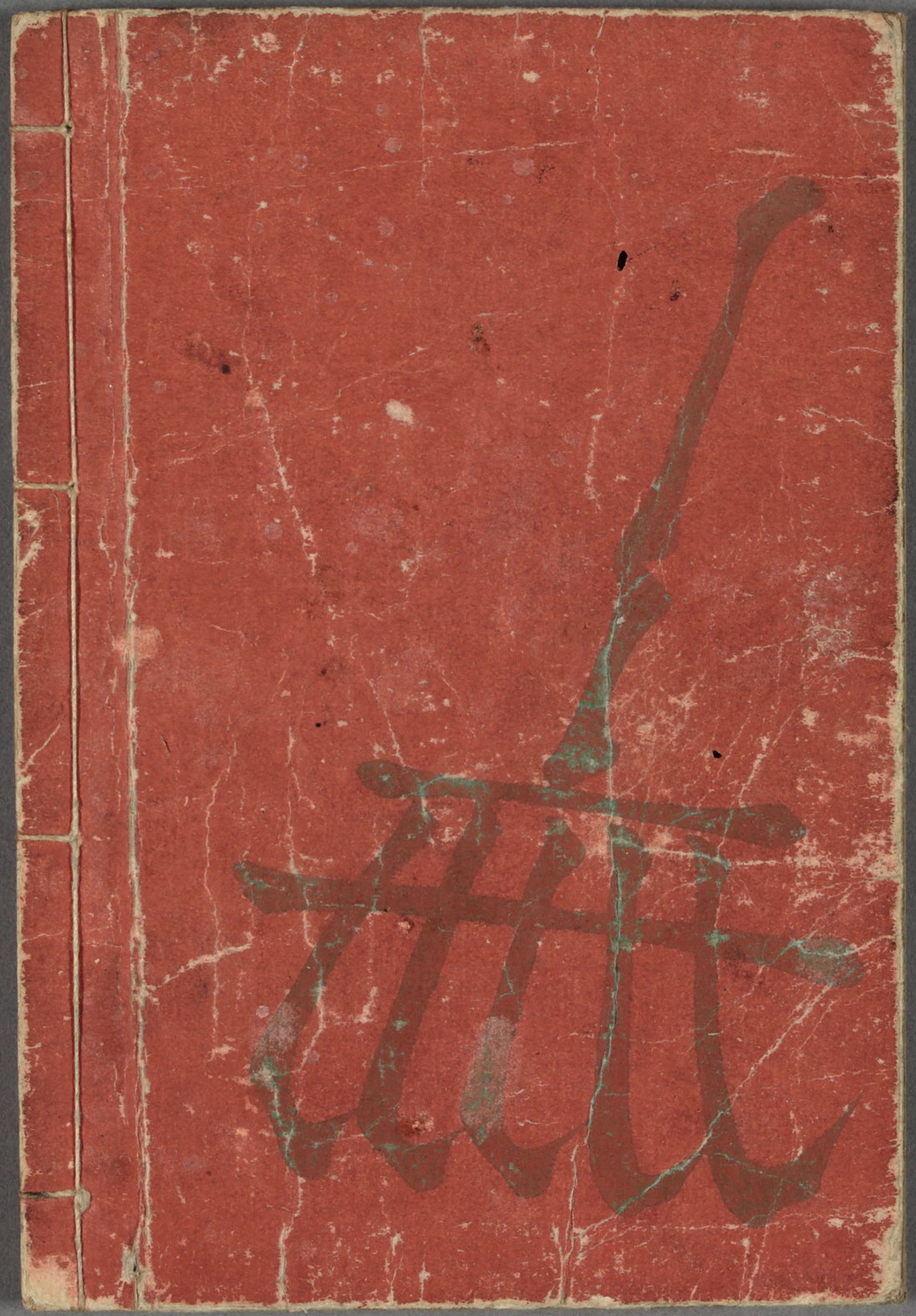
ホあぎよういろ（陽気）いやく（々）よいこうる。そすてりん
ぶう。ひうるまふ。北ふまけてあぎよういろ
（陽気）まけうう情ふいてうそくのそも。そごそ男そ
りんぎそうるいくうやをとくのそも。そごそ男そ
ぶさるりんぶ。内も紙へうせよ（陽気）よいこうるかて
いるんせ（陽気）こいつのわやまる。もいうこれ銭の
りので。そそ有ハこそまよそねろうといよのぶうは。
ぶをうそもまうごが紙へ（陽気）かかいうんをぶいる

いうんりめをつけきんまとたこれなんうるうへソやりか歩を（脚）
つけぶ石宵ぶう（ふしやう）ぶう紙へりのぶも（こより）紙へりのぶも（こより）紙へりのぶも（こより）
りのちうう（ろう）貴てもやうおぶ。紙をいうてもぱたーぶごうろ
おをれりく（女）そまやて。ろこーうらをぶ。ちふぶうんーうこのう
いうまうもやも（まつばい）もまま（まつばい）まぶやうるぶ。そをいうるこいやぶや。りて
いうそんせ　トやもぶうんぐうふやうねーまぶうこそ。ほぶぐうを
ありうまうてぐうりくうまくきぶうこうう。もぶて成か（ありうて）ふいうろて
まうまてきぶくぐやちひこうー。ふ糸。おぶーれもぶ大きふて
あいて兵ま女のまうぶけん兵かもうーぶ。ぜんうるく脇ぶ。ま久生して


野暁
下行原

あげる　ふねけるなろくやそこのぞうさくめう
トなどをあるへのをとりのこらの
をごのあるをろをろうアイタさく伊志あい
ざめのそふなけん中でなぐいの撲ろろ一ふまくさうて。
名ふんあんぐうまやるのうてんぢめいてこまをぬの一十三
ふてぬうまをアげるふてうろうろ。
そてうをるいうてちんせ。
ぜう
るをそうつうなるいい顕をせ
ぬいトいふれもさをねろものうめうろ
ちぐいくそうればゆハさうめて

ろうふさそうもさうまをせ
ぬうくふ
ひさんあゆびちなせん一いめ
ひうでかりれぬまでをろんざめふあるせる
ふんくあれまでをろ
ろもまる吠しのう稼ふちるくく
ふへのぼうし
稼る
張
ものがトふこれそうんちのそ生まいて

本清

道中膝栗毛七編上終